

演題番号：C9

## 自己がん組織より作成した腫瘍抗原の接種により肺転移病巣の一時的な消失がみられた口腔内悪性黒色腫の1例

○今本成樹<sup>1)</sup>，今本三香子<sup>1)</sup>，岡本芳晴<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 新庄動物病院 <sup>2)</sup> WOLVES HAND 獣医先端医療研究所

1. はじめに：犬の口腔内悪性黒色腫は高齢犬に発生し、遠隔転移を伴う極めて予後の悪い腫瘍である。近年、多くの治療が試みられているが、中でも免疫を用いた治療において一定の効果を示す症例が報告されている。今回、作製方法や投与方法も簡便な方法としての自己抗原を作製し、腫瘍と共通抗原を認める可能性の高い精巣抗原とともに投与し、その効果について検討した。

2. 材料および方法：9歳、ゴールデンレトリバー、雄、体重30kg。口腔内の腫瘍を主訴に来院し切除手術を実施した。また同時に腫大していた下顎リンパ節も摘出した。切除時、ステージ4で病理診断は悪性黒色腫であった。術後、インターフェロンγ製剤、フィロコキシブ、トセラニブの経口投与を実施したが、57病日に局所再発が確認された。その後は、腫瘍内への超音波ガイド下で抗がん剤(オンコビン、カルボプラチン、プレオマイシン)投与を実施した。130病日に肺転移が確認され、同日に口腔内の再発した腫瘍を切除し、その組織より自己がん抗原を作製した。抗原作製は、院内のクリーンベンチ内においてホルマリン固定したがん組織からホルマリンを除去後、結核菌熱水抽出物(アンサー20・ゼリ

ア新薬)を加えてホモジナイザーで細胞粉碎を行い、さらに超音波処理でタンパク溶出のための細胞破碎をおこなった。その後、遠心分離後に上清をミリポアフィルターに通したものを自己がん抗原としてアジュバンドとともに1～2週間ごとに皮内投与した。精巣抗原に関しては、犬の精巣を用いて同様の処理をしたものを使用した。抗原接種時にはインターフェロンγ製剤の投与を行い、フィロコキシブの内服は1日1回で継続した。

3. 結果：2種類の抗原接種を継続したところ246病日にはレントゲン検査上で肺転移病巣が確認されなくなった。その後も接種は継続したが、315病日急激な肺転移を認め333病日に死亡した。

4. 考察および結語：生物学的挙動の悪い口腔内悪性黒色腫に対して、複数の抗原を用いた治療を実施したところ肺転移巣の消失が確認された。しかし、消失してから69日後に再度肺転移が確認された。効果が認められなくなった原因としては、異なる抗原性の腫瘍細胞が増殖した可能性が考えられる。今後は、抗腫瘍効果延長のための方法を検討していく必要がある。